

対談シリーズ14 第99回日本泌尿器科学会総会

郡 健二郎

名古屋市立大学教授・第99回日本泌尿器科学会会長

小 川 修

京都大学教授・泌尿器科紀要編集委員長

小川：今日は第99回日本泌尿器科学会総会を主催される名古屋市立大学の郡教授におこしいただき、お話をお聞かせいただくことになりました。それではまず来年の総会のテーマとされている「医道白寿：永遠への途上」に関して、その基本的な理念や先生のいだいておられるイメージをおうかがいしたいと思います。

郡：今回の大会は100周年記念大会の前の99回の総会です。それにちなんで「白寿」という言葉を使いました。そして「医道」という言葉で医師の基本的な姿勢を一言で表現したかったのです。しかし、白寿というと古くさくレトロ的な感じがあるでしょう。ですから、未来に向けての前向きの姿勢を「永遠への途上」という副題で表しています。

小川：それでは、この総会テーマにそって先生の工夫されたプログラムの企画は何でしょうか。

郡：この総会の1つの方向性は、これまで泌尿器科を極めようとされてきた大先輩に登場いただきプログラムに参加してもらうことです。話は若干ありますが、わが国にはリタイアされた方々の多くは学会からも名実ともにリタイアしてしまうという、よくない慣習があります。しかし先輩方はそれまでやってこられた長年の蓄積や知恵をもっておられ、その中には次の世代が引き継ぐべきものがあると思うのです。若い人達は、先端的な、あるいは細分化された泌尿器科学を一生懸命やっているのですが、自分達の今の立つ位置が、これまでの先輩達の努力の継続の中にあるということを知ることは非常に大切なことだと思います。

小川：プログラム企画をみますと「医道白寿企画」というのがあります。13課題が設定されていて、一人のかたが司会をされ、1部はベテラン、2部は比較的若い先生の講演という構成になっています。

郡：その道を極めてこられた先輩の先生にアーカイブ・レクチャーとしてお話をいただこうと思っています。アーカイブ・レクチャーの演者だけはすべて私自身が選ばせていただきました。その先生方がこの企画に沿ってどのようなレクチャーしていただけるか、大変楽しみです。

小川：今回のプログラムのもう1つの特徴は、五木寛之さんや中曽根康弘元総理など、医療とはあまり接点のない方を招請された企画があることです。

郡：これは「医道」に通じると私は思っています。私



はプログラムの挨拶文に「私が若い頃に参加したある学会で、これまでの学会にはない斬新な企画に心を打たれ、医学の捉え方が一変するほどまでに衝撃を受けた。」と書きました。それまでの学会は、シンポジウムをして泌尿器科のコンセンサスを形成したり、自分たちの臨床成績を報告したりするだけのものでした。それが学術集会だと思っていたのです。しかし、その総会には、梅原猛先生をはじめ、様々な分野のかたがこられて講演をされました。現在の医師や医学研究者は、技術を磨くことや解析技術を洗練させること、例えば技術認定だとかゲノム解析とかに興味を持ちすぎているように思います。やはり医学を超えた基本になる心構えがしっかりしていなければ深みのある医療者にはならないと感じています。

小川：もう1つの企画で「目指せ！泌尿器科の星」という、興味深いタイトルのセッションがあるのですが、これについて聞かせてください。

郡：京都大学名誉教授の吉田先生との会話の中で、「最近の若者は心が渴いている」という話を伺いました。誰か他の方が表現された言葉だということですが、最近の若者の心の有り様を実にうまく表されている言葉で、冷めているとか、やる気がないとか、あるいは夢を失っているというような状態を言い当てています。若者だけではなく、年輩者を含め、現在の日本社会自体の雰囲気だと思います。

名古屋のテレビ番組で「目指せ！会社の星」というのがあります。仕事のみならず、ファッションや社内恋愛などを取り上げて、若い人の意見や活動を紹介し

ながら、新人社員に楽しく情報提供しようという企画です。また、きらっと輝く若手会社員にスポットをあてて、若い力を応援しようという番組でもあります。これを今回のプログラムに取り入れました。このような意図の企画は岡山や盛岡の総会でも当然やっておりましたが、これを前面に出したプログラムとしてやりたいと思ったのです。NHKで収録し、全国に放映される予定です。活力ある泌尿器科医の姿を通して、医療人の渴いた心が潤えばと思います。

小川：副題が面白いですね。「泌尿器科医のアフター5」「研究のすすめ—研究で世界一になる必要があるのでしょうか？ 臨床だけではだめなのでしょうか？—」など、どのような内容になるか本当に楽しみです。それと、「医学歴史・未来館」という企画も興味深いです。

郡：これはメインテーマに沿った医学館を作ってみようという企画です。最初は小部屋を用意しようと思っていたのです。しかし、各所に協力のお願ひに行きますとみんなすごく積極的で、「喜んでお貸しします」とか、あるいは「当日説明にいきましようか」とか言うていただけるんです。結局300平米近くの部屋を使わないと収まらないぐらいになっています。解体新書の現物も貸してもらえることになっています。解体新書の複製だったら、みんなで自由にペラペラめくってもらえます。華岡青洲が使っていた手術器具も見てもらえることになっています。

ただレトロばかりでは淋しいので、未来館も出します。バイオ技術とロボット技術を使って今開発されているいろんな医療機器を展示する予定です。この未来館はいろんな大学の研究室の先生をお願いして実現しました。彼らも非常に協力的で「説明に大学院生を4日間派遣します」とか言うてもらえるんです。

小川：共同研究とかのきっかけになれば両方にとってメリットがありますね。それでは、総会の話題を離れてすこし違った話題でお話を聞かせてください。先生はこれまで病院長や医学研究科長を経験され、高い立場から、大学のあり方、特に医学部における医学教育や研究のあり方を考えてこられたと思います。まず、医学部生や若手医師の教育に関してお聞きします。さきほど「心が渴いている若者」という話を聞きました。

郡：お話できるような素養は持ち合わせていません。あえて言えば、これは医学教育だけで語ると付け焼き刃的な解決になるので、初等教育まで戻るべき大きな問題だと思っています。まず、偏差値優先の教育によって、医学部に偏差値の高い人が集中しすぎているように感じています。初等教育を担当する人材は非常に重要ですが、本来初等教育では、事実や現象を覚えさせたりすることより、その背景にある物事の考え方

などを教えることが重要なのに、そういう教育が来ていない。大学入試や国家試験も〇×式や五択です。そうすると「理由は何でもいいから早く答えを教えて下さい」というようになってしまいます。ゆっくり本を読むとか、行間にまで思いをはせるなどということはないですね。

このような環境で育つてくると、学生の皆さんは真面目で優しいですが、叩けば響くような伸びしろがないように感じるんです。偏差値の高い医学部の学生ですらそのような雰囲気があります。

小川：これを良い方向に向かわせるには、何が必要でしょうか。

郡：一番簡単な方法は受験制度の変更だと思います。根本的に個々の改革をしていくというのは大変なことですが、試験の方法を変えると教育は大きく変わっていくと思います。昔の旧制高校の時代ですと、自分で筆記したり、一冊の本を熟読する機会がたくさんあったように聞いています。また、哲学は知らなくても数学は得意だとか、そういう自分らしさの勉強というものがあったように思います。哲学も数学もすべて均等に勉強しないといけないというのは可哀想です。医師国家試験の方法も同じで、現行では深みのある学問は身につかないのではと心配します。

小川：昔は学校が終わってからいろいろな社会を経験する場がありました。近所の子供同士のつきあいの中でガキ大将がいたり、クラブ活動などで自分より遙かに能力の高い人を尊敬したり。そういう時間や機会があつて、その中で社会のしきたりとか上下関係とかいろいろなことを学んできたように思います。そういう機会が今の若い人達には少なくなっているんでしょうね。

それでは、研究のほうに話題を移したいと思います。名古屋市立大学の泌尿器科では非常に高いレベルの研究を精力的にすすめておられますが、医学研究のあり方などについて先生のお考えを教えてくださいませんか。

郡：私たちの教室は語るほどの研究はしていませんが、考える楽しさや発見する喜びを味わわせるように指導しています。私は若い先生には「研究テーマはこれにきなさい」とは言いません。研究テーマは自分の自由な発想から生まれてくるものです。ですから、金太郎飴的な安易な発想の研究はさせません。先ほど話題になった「〇×式」や「五択」の発想は駄目なんです。そのような研究はしてほしくない。その枯渴した状況がつづくとおのずと新しいものが出てくるように思います。

小川：最近では、臨床重視の方向性があつて、なかなか研究や大学院の魅力を知ってもらえないようになっています。先生のご教室での工夫はなにかあります

か。

郡: 私たちの教室では, 大学院前くらいの年代の若手の泌尿器科医が, 関連病院の業務の間の時間を使って研究室に顔を出すような雰囲気があります。もちろん全員ではありませんし, それを強いるわけでもありませんが, 自然に自分も先輩に続いてやるものだというような環境づくりには努めています。しかし, どの研究グループに付きなさいとか, これをやりなさいと言うことはありません。

小川: 研究グループのサプリーダー達が, そのような研究予備軍を作っているんですね。すこしでも研究に興味があったら, 仕事が終わってからでも実験室に顔を出して, それで「これから一緒に研究やろうよ」というみたいな感じになってくるわけですね。

先生は卒後の医師教育の現状をどう思われますか。確かに若手医師全員が医学研究を4年間やる必要はないと思いますが, 今のような臨床実践を超重視したシステム作りをしていくと, 本当に日本の医学研究がどんどん衰退していくような気がしています。最後にはちゃんと科学的に考えられる医師がいなくなるのではないかという心配すらあります。

郡: 同感です。3つの問題があると思います。1つは教育関連の予算削減です。私の母親は「あなたには財産はなにも残せないが, 教育だけは与えておいた。」と言いました。私は「教育を与える」という財産は, 他の財産に比べて国の将来像を作る時に一番大切だと思っています。その財産づくりの予算を削減する国のセンスは私にはわかりません。

前にも触れましたが, 日本の優秀な人の多くが医学

部に集中しすぎていることが2つ目の問題です。善し悪しは別にして, 来てしまった医学部の人的資源を社会にどのように還元するかということは考えないといけません。偏差値だけが優秀さの尺度ではありませんが, 私はもったいないと思っています。日本を再興するのは, 意外と医療・医学じゃないかと思います。iPS研究の山中教授のようにぴかっと光る研究者が出てきて, それが日本を良くするきっかけになるのではと期待しています。

3つ目は自ら考えるという姿勢を教えることです。これは臨床医として一人の患者さんを診るときにも重要です。仮説をたてて, 研究方法を立案し, 鋭い観察力と洞察力で新しいものを発見し, 結果を解釈して発表するという一連の流れは, 一人の患者さんの病態を理解して, 最初から最後まで診さるという姿勢に通じます。そして, 一度, その姿勢を覚え込んだら, 研究自体は継続しなくても, 医師としての基礎は揺るがないと思います。

小川: 私が好きなゴルフでもスキーでも同じですけど, 1年か2年しっかりやって基礎を固めれば, いくら年月をおいてもそこそこやれるんです。経験していなければ, まったく出来ません。一定の期間で医学研究の基本を学べば, 一生の宝になると思います。

郡: 私も同感です。

小川: 第99回の学術集會を「医道白寿」というテーマで主催される郡先生にお話をお聞きしました。大会の成功をお祈りするとともに, 私自身, 大会を楽しませていただこうと思っています。本日はありがとうございました。